令和8年10月29日

保護者・地域のみなさまへ

羽曳野市立丹比小学校
校 長　　古 寺　正 治

令和8年度全国学力・学習状況調査結果概要について

平素は、本校教育活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。令和8年4月中旬に実施しました「全国学力・学習状況調査」結果の概要及び今後の本校における取組等について、下記のとおりお知らせします。

記

1. 実施目的

・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るため。
・学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるため。
・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立するため。

（「令和8年度全国学力・学習状況調査に関する実施要項」より）

2. 調査対象・実施日　第6学年・令和8年4月23日（木）国語・算数、4月24日（金）生活アンケート

3. 調査の内容

（1）教科に関する調査「国語」「算数」

出題範囲は、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を原則とし、出題内容はそれぞれの教科に関しは以下のとおりとなります。

①身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等。

②知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て、実践し、評価・改善する力等。

※なお調査問題では、上記①と②を一体的に問うこととする。

（2）質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査。

（「令和8年度全国学力・学習状況調査に関する実施要項」より）

4. 調査結果の取扱い

○ 調査結果の分析・検証を踏まえ、本校の教育指導等の改善に向けて、計画的に取り組みます。
○ 家庭や地域とも成果・課題を共有し、改善につなげるものとします。
○ 調査結果は、中学校区でも共有し、共通で取り組める内容について検討・実践していきます。

調査により測定できるのは学力の特定の一部分であること、学校における教育活動の一側面であることなどを踏まえ、序列化や過度な競争が生じないようにするなど教育上の効果や影響等に十分配慮すること。
（「令和8年度全国学力・学習状況調査の結果の取扱い及び調査結果の活用について
（文部科学省 通知）より」）

5．調査結果の概要（ダイジェスト版）

本校の「強みのみられる内容」	本校の「課題のみられる内容」
◇考えを支える適切な事例を吟味、把握することができる。 ◇基本的な計算力の定着。 ◇基礎的な処理技能の素地が整っている。 ◇学校が、自分の気持ちや自分の思いなどを教職員や学級の仲間へ安心して伝えることができ、それを受け止めてもらうことができる場所となっている。 ◇互いの意見を尊重しながら、集団の課題を解決しようとする主体的・協働的な姿勢がみられる。	◆自分の伝えたいことが相手に伝わるように話の構成を考えること。 ◆文章全体から、目的に応じて、必要な情報を見つける力。 ◆条件を整理して記述、表現する力。 ◆基本的な学習内容を拡張、応用させた問題への対応力。 ◆家庭での読書量と、学習時間の少なさ。新聞等を読まないことからくる活字にふれる機会。

※上記のダイジェスト版についての詳細は、次の「調査結果の分析・考察・以後の改善点」をお読みください。教科（国語、算数）及び質問調査（アンケート）にそれぞれ分類して記してあります。

6．調査結果の分析・考察・以後の改善点

（１）教科に関する調査について

「国語科」

【成果（強みのみられる問題・内容）】

◇今年度の国語の問題にて、本校の強みとして顕著に表れたのが下記の２つです。

①「考えとそれを支える理由や事例など情報と情報との関係について理解することができるかどうかをみる」という問題において、成果がみられました。本校児童の正答率と全国平均正答率との差は11.9ポイントにとどまりました。考えとそれを支える理由や事例など情報と情報との関係について理解するためには、考えがどのような理由や事例によって支えられているのかを吟味することが重要であります。ここでは、わかりやすく説明するためには考えを支える事例が必要となり、その事例を読み、どの選択肢が適切であるかを捉え、正答を選ぶことができました。

②「引用して、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる」という問題において、全国の正答率も低い中、成果がみられました。本校児童の正答率と全国平均正答率との差は11.3ポイントにとどまりました。引用して、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫するためには、引用する目的を明確にすることが重要になります。その上で、原文から正確に引用することや、引用した部分と自分の考えとの関係などを明確にし、区別して書くことが大切です。ここでは、涼しく過ごせる衣服の色について考えたことを書くために、集めた情報の中から、必要な要素を選んで、抜き出し、そしてまとめることが求められる中、正答にたどり着くことができていました。さらに、誤答についても詳しく見ると、正答には至らなかったものの、正答条件４つのうち、１つ以上満たしている児童は４割程度でした。

【課題のみられる問題・内容】

◆今年度の国語の問題にて、本校の課題として挙げるのが下記の4つです。

①「相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えることができるかどうかをみる。」という問題においては、本校児童の正答率は全国

平均正答率と比べ、22ポイント下回る結果となりました。自分の伝えたいことが相手に伝わるように話の構成を考えるためには、具体的な相手や目的を意識して、話の中心が明確になるように理由や事例などを挙げ、筋道を立てた構成にすることが重要であり、そういった力が身についているのかを問われていました。誤答を見てみると相手に伝えるために必要になる理由や事例の提示の仕方、話の構成を正しく捉えることができなかったと考えられます。

②「話や文章の種類とその特徴について理解することができるかどうかをみる」という問題においては、本校児童の正答率は、全国平均正答率と比べ、19.3ポイント下回る結果となりました。話や文章の種類とその特徴について理解するためには、日常生活で児童が触れることの多い話や文章について、目的や内容、表し方などに着目しながら理解できるようにすることが重要になります。児童がこの系統の問題で誤答してしまう背景には、次のような課題があります。一文一文の文字は読めても、文章全体を俯瞰して「何のために書かれた文か」を考えていないことや叙述（本文の言葉）を根拠にできず、答えを選択しているといったことが見られます。また、キーワード（接続語・文末）に注目できておらず、文章の種類を決定づける要素を見逃しているといった様子もあったように考えられます。

③「目的に応じて、必要な情報を見つけることができるかどうかをみる。」という問題においては、本校児童の正答率は、全国平均正答率と比べ、29.6ポイント下回る結果となりました。目的に応じて、必要な情報を見つけるためには、文章の中から必要な情報を取捨選択したり、整理したり、再構成したりすることが重要になります。文章全体を漠然と眺めてしまい、何を探せばいいか分からないといったことや見つけた言葉が、本当に目的に合致しているか吟味し切れないといった現状が見受けられました。

【課題改善に向けての今後の取組み】

①思考の整理を行うために、文章を書く前に思考ツール等を効果的に活用することが大切です。まずは、「中心となる考え」と「理由・事例」を視覚化することで、「書く」ための準備をします。

②「構成の型」⇒書くことや話すことに必然性がある学習活動を増やし、「主張・根拠・事例・まとめ」などにあてはめて書くことや話すことを経験させます。

（例）①はじめ（主張）　② なか１（根拠）　③ なか２（事例）④　おわり（まとめ、結論）

③「文章構成図」や思考ツールの活用を効果的に行っていきます。例えば、説明文なら「はじめ・なか・おわり」、物語文なら「設定・展開・結末」を視覚的に整理するようにします。そして、便宜的に、思考ツール（マトリクスやベン図など）を使い、文章ごとの違いを比べることも取り入れていきます。

④「目的」と「表し方」の結び付け「なぜこの文章は図表が多いのか（説明文や新聞）」など、書き手の意図を考えることにも目を向けさせ、事実と感想、意見がどのように区別されて書かれているかを意識することを大切に進めていきます。

⑤日常的なメディア（新聞・リーフレット・広告）の比較教科書だけでなく、実際の新聞記事やパンフレットを読み比べさせます。

⑥文章の特徴を「読む」ことでも捉えることはできますが、自ら「書く」言語活動をすることで、知識がより深く定着します。そこで、書くべき文章（例：報告文）の優れた構成モデルを提示し、分析させることやその文章特有の型や接続詞、構成を意識して、実際に書いてみる活動を取り入れるようにします。さらには、相互評価することや友だち同士で読み合うこと、「目的や意図に応じた書き表し方ができているのか推敲し合うこと」も授業に組み込めるようにします。

⑦課題を克服するためには、児童自身が「自分はどうやって情報を見つけたか」というメタ認知（解き方などの学習方法に対する振り返り）を行うことが重要です。こういった学習活動を行う時間も、授業の中で取り入れます。

「算数科」

【成果（強みのみられる問題・内容）】

◇今年度の算数科にて、本校の強み（高い定着が見られた点）として顕著に表れたのが下記の３つです。

①「3 (1) 1、5、9の3枚のカードを当てはめてつくることのできる最も大きい数を書く」という問題において、本校児童の正答率は、全国平均正答率と比べて、その差は僅か3.8ポイントにとどまりました。正答率だけでなく、誤答だった9.3%の児童の解答（無解答5.6%、その他の誤答3.7%）についても細かく分析してみると、大きな計算違いや突拍子もない数字を書いている児童はほぼみられませんでした。このことから、本校児童は小数が整数と同じ十進位取り記数法の仕組みで表されていることについて、理解が定着していると言えます。日々の基礎的な数概念の指導が実を結んでいることが分かります。

②「3 (4) 5/3を表す目盛りが示された数直線上で、1を表す目盛りを選ぶ」という問題において、本校児童の正答率は全国平均正答率と比べ、その差は7.0ポイントにとどまりました。数直線を用いた分数の概念理解が概ね形成されていることがうかがえます。

③「2 (1) 74291の百の位の数を四捨五入して、千の位までの概数で表したものを選ぶ」という問題において、本校児童の正答率は、全国平均正答率と比べ、その差は9.1ポイントにとどまりました。誤答だった35.2%（無解答7.4%）の解答を分析すると選択肢「ウ（75000）」を選んだ児童が22.2%（全国も21.3%）と最も多くみられました。これは百の位の「2」を切り捨てるべきところを「切り上げ」と誤認したか、目的の位の一つ上の位に着目してしまったことが原因と考えられます。四捨五入のルール自体や「目的の概数にするために着目する位」への意識は育っており、基礎的な処理技能の素地が整っているといえます。

【課題のみられる問題・内容】

◆今年度の算数科にて、全国平均正答率と比べて、全体的に16.4ポイント下回る結果となりました。全体的に厳しい結果となりました。すべての領域、観点での底上げが必要です。その中で特に課題として挙げるのが下記の３つです。

①「1 (2) 直方体の箱の形の六つの面のうち、四つの面が示されたとき、残りの二つの面の縦と横の長さを書く」という問題において、本校児童の正答率は、全国平均正答率を29.7ポイント下回っています。正答「縦5cm、横12cm」に対して、「縦5cm、横8cm」と答えた児童が14.8%、「縦8cm、横12cm」と答えた児童が24.1%、上記以外の誤答が24.1%いました。このことから、直方体の向かい合う面は合同であるという基本的な図形の性質の理解が不十分であり、示された立体や展開図から必要な面の寸法を正確に読み取る空間観念・位置関係の把握に大きな課題があることが分かります。

②「3 (2) 二つの小数のどちらが5に近いかを判断するために、6.37-5と5-3.76を計算する」という問題において、本校児童の正答率は、全国平均正答率を26.6ポイント下回っています。正答「1.37」と「1.24」に対して、「1.37」と「2.24」または「2.34」と答えた児童が29.6%（約3割）いました。このことから、6.37-5の計算はできているものの、「5 － 3.76」のように整数から小数を引く際に整数「5」を「5.00」と捉えて位を揃え、繰り下がりを行って計算する筆算のアルゴリズムや位取りの概念が定着していないことが分かります。筆算の見た目だけで「5-3=2」「0.76をそのまま書いて2.76や2.24」と処理してしまう機械的な誤解が多く見られました。

③「2 (4) 赤いテープの長さが、白いテープの長さの1.5倍になっている図を二つ選ぶ」という問題において、本校児童の正答率は、全国平均正答率を21.2ポイント下回っています。正答「ア、オ」に対して、「イ、エ」と答えた児童が29.6%、「上記以外の誤答」が20.4%、無解答が9.3%いました。このことから、

基準量と比較量の関係（1.5倍＝1倍と0.5倍の和）を視覚的なテープ図や数直線図と結びつけて捉えることができていないと言えます。「イ、エ」を選んだ約3割の児童は、図における目盛りの意味や「割合」の概念を関係性としてではなく単なる長さの差などで感覚的に判断してしまったことが考えられます。

【課題改善に向けての今後の取組み】

○「言葉・図・式」を相互に関連付ける日常の授業改善

割合（倍）や図形の構成要素、小数の計算など、単に公式や計算手順を暗記させるのではなく、「なぜその式になるのか」「図のどこを表しているのか」を児童自身が自分の言葉で説明・共有する場面を多く取り入れます。

○計算のアルゴリズムと「位取りの概念」の再徹底

「5 － 3.76」で見られたような整数と小数の加減計算のつまずきに対しては、整数も小数点の位置（5.00）を意識させる指導を徹底します。普段の授業、ドリルパーク、宿題等を活用し、正しい計算方法の定着、計算力の向上をめざします。

○条件を整理して記述・表現する力の育成

記述式問題や条件の多い問題で無解答率が高くなる傾向（1(4)で18.5%、4(1)で13.0%など）が見られます。本校ではSE事業で言語活動を中心に添えた授業改善を進めています。単元テストや普段のワークシートの中で「○○について理由を書いて説明しよう」といった問いに日常的に取り組み、問いの意図に沿って根拠を書いて表現する力を育てていきます。

（２）質問紙調査について

※児童質問紙調査は、全７３問があり、本年度の主な調査項目は、以下のとおりです。

「児童の生活状況」 「挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等」 「地域や社会に関わる活動の状況」 「ICTを活用した学習状況」「主体的，対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況」「学習に対する興味・関心や授業の理解状況」等

【成果（強みのみられる問題・内容）】

今年度の調査結果において、本校の強みとして顕著に表れたのは以下の項目です。

① 教職員への信頼感と自己肯定感の醸成

「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか(質問 9)」という問いに対し、本校の肯定的意見(『当てはまる』『どちらかといえば、当てはまる』の合計)は全国平均の 91.4%と比べ 5.0 ポイント上回っています。 このことから、全教職員が児童一人ひとりに寄り添い、その良さを認めようとする姿勢が児童に深く浸透しており、学校が自分の居場所であるという安心感につながっていると考えられます。

②多様な意見を尊重する学級の雰囲気

「あなたの学級では、人と違う意見を言っても否定されないと思いますか(質問 20)」に対し、肯定的意見は全国平均と比べて 85.7%と 16.1 ポイントも大幅に上回っています。これは本校の大きな財産であり、SE 事業が目指す「言語能力をはぐくむ学習」の前提となる、自分の考えを安心して発信できる「心理的安全性」が高いレベルで確保されていることを示しています。

③ 主体的・自治的な話し合い活動

「学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか(質問 49)」に対し、肯定的意見は 85.7%(全国 81.5%)でした。 児童同士が互いの意見を尊重しながら、集団の課題を解決しようとする主体的・協働的な姿勢が育っていると言えます。

【課題のみられる問題・内容】

全国平均と比較して、改善が必要とされる課題は以下の通りです。

① 家庭における読書環境の不足「あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか(質問29)」という問いに対し「0～10冊」と回答した児童の割合が23.2%であり、全国平均の13.0%を 10.2 ポイント上回る(全国より本が少ない家庭が多い)結果となりました。日常生活において活字に触れる機会や、思考や表現の基盤となる語彙を蓄積するための物理的な環境が不足していることが依然として深刻な課題です。

②相手を意識した「工夫して伝える力」の不足
「自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか(質問 38)」という問いに対し、肯定的意見は 60.8%から5.6 ポイント下回っています。学級での安心感から「発言する」ことには抵抗がないもののそれを相手に合わせて「効果的に伝えるための工夫」を加える段階において、具体的な技能や意識が不足していると考えられます。

【課題改善に向けての今後の取組み】
本校が SE 事業として取り組んでいる「言語能力をはぐくむ学習」をさらに推進し、現在の強みである「安心感」を「確かな表現力」へとつなげていきます。
○ 「ホンツナ(本でつながる)」活動のさらなる展開
家庭での読書環境を補うため、学校司書と連携した読書指導を継続します。本紹介動画の作成や、地域・保護者による読み聞かせや朝読書の充実を通じて児童が多様な言葉に出会い、表現の糧となる語彙力と想像力を養う機会をつくります。

○ 「相手・目的・条件」を明確にした授業づくり
「工夫して発表する力」を高めるため、各教科の言語活動において「誰に対して」「何のために」伝えるのかという目的を意識した授業づくりをめざします。具体的には、「資料から読み取ったことに自分の考えを入れてまとめる」や「SDGsを〇年生に伝えよう」などの実践を取り入れます。相手意識をもたせ、表現技術を具体的に指導し、単なる発表に留まらない「伝えるための工夫」についても考えさせます。

○ 「学びの地図」の活用による思考の可視化と共有
児童が自ら学び方を工夫できるよう、情報の整理方法やスライドの作り方をまとめた「学びの地図」を全校で活用します。算数や社会等において、身近なデータをグラフや図で「可視化」し、根拠に基づいて説明する活動を意図的に設定します。現在の強みである「否定されない安心感」をベースに、友だちと意見を交流し、自分の考えをアップデートする経験を積み重ねることで、思考力・判断力・表現力の向上を図ります。

○ 教職員間での連携と研修の深化
SE 事業の趣旨を踏まえ、SE 担当を中心に学習部内それぞれの担当教員が連携し、児童の変容を組織的に見守ります。公開授業や相互参観週間を通じて、「言語活動の充実」に向けた指導の手立てを全教職員で共有し、学校全体で授業改善のサイクルを回していきます。